

田中康夫の



27

「2020東京オリンピック」

「オリンピック12年周期説」を以前から提唱してきました。「オリンピックは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学」。

04年の施設を有効活用してこそ、造るから直す・護る・創る。21世紀型公共事業のあり方です。

続いて12年に一度は、一定以下のGDPに留まる「途上国」で開催。

思い起こせば1964年の東京五輪は、東海道新幹線や首都高速道路の供用に加えて、都心部に於ける下水道普及の契機となりました。日本を含む先進国が資金を拠出し、競技場に留まらぬ社会的共通資本の整備を欧米日のゼネコン⇨ゼネラルコントラクターが担当。これぞWin-Winの公共事業です。

フラジャイル5とモルガン・スタンレーが名付けた脆弱な5通貨国のブラジル、インド、インドネシア、トルコ、南アフリカでの開催を先ずは優先すべき。シドニー、リオデジャネイロの2都市に留まる南半球での開催にも繋がります。

而して3番目は「先進国」での開催。アテネと同じく既存の施設を有効活用。それは、耐震補強を始めたとする維持修繕分野では世界屈指の技術力を誇る日本が、アジア・アフリカ・中近東市場で鎗を削る中国・韓国の建設会社を引き離す好機となります。以上が「オリンピック12年周期説」の根拠。

1984年のロサンゼルス大会以来、「商業主義」の色彩が強まったオリンピックを見直すべくIOC⇨国際オリンピック委員会は、大会費用を削減し、運営の柔軟性を強化すべく、既存施設を最大限活用し、一時的会場の利用も促進する「アジェンダ2020」を発表。それは「脱ホワイトエレファント」⇨脱遺跡化、「脱グリーンウォッシング」⇨脱お題目を掲げた2012年のロンドン大会の流れを組む方向性です。

ホワイトエレファントとは維持費が高む無用の長物を意味します。嘗てタイの王様が富裕な商人に白い象を寄贈。稀少価値なるも飼育費用が莫大で困惑した逸話に基づきます。グリーンウォッシングは、欺瞞的な上辺の環境配慮でお茶を濁す企業を揶揄する言葉。

今回の東京同様に多くの市民・国民から指弾されたロンドンは、常設席2・5万席、仮設席5・5万席へと設計変更しています。常設席6・5万席、仮設席1・5万席への微調整で事足りれりと未だ抗弁するJSC⇨日本スポーツ振興センターとの彼我の違いは明白。「ゼロベース」との公言が巧言・

広言・高言とならぬ為にも、屋根の有無を含め、陸上競技・球技・歌舞音曲の多目的施設に拘泥するの可否か。脱「国威発揚」、脱「商業主義」への転換が不可欠です。

IOC副会長で東京大会IOC調整委員長を務めるジョン・コーツ氏は既に昨年7月24日付「讀賣新聞」単独インタビューで「我々は見直しを寧ろ奨励する」「レガシーとは施設ではなく、目指す社会や人のあり方」だと警告しています。その警告が発せられたのと奇しくも同じ7月24日から17日間の日程も「ゼロベース」で見直すべき。

日本晴れの10月10日に開会式を挙行した前回の東京五輪と異なり、40°C近い猛暑とゲリラ豪雨に見舞われる蓋然性が極めて高い中、マラソンを強行するのは選手と観客への「拷問」です。

プロスポーツが夏休み中で中継枠が取り易い米国TVメディアのご都合主義的理由から真夏の開催となった近年の五輪を見直してこそ新しい伝説⇨レジェンドの創出。スポンサーとして巨額の費用を負担するのは日本企業。脱「ミツグ君」の物言うニッポンを打ち出す絶好の機会ではありませんか。

★次号の月号の発行日は8月28日(第4金曜日)です。